

批評と紹介

譚汝謙主編

中国訳日本書綜合目録

山根 幸夫

本書は一八八三年から一九七八年までに、中国大陸・台湾・香港・日本および其の他の地区で出版された、約五千点の中国訳日本書を収録しており、千ページ近い大著である。内容は人文科学・社会科学・自然科学等、学術書はいうまでもなく、一般書に至るまで、「雅俗を分たず」尽く収録している。

本書編集の苦心談については、譚汝謙氏が自ら『東方』一二号（一九八〇年一月）に「日中訳書目録編集記」と題して、詳述している。それによれば、譚氏はかねてから中日・日中の二種の訳書目録を出版し、「もって日中文化交流の系統的な研究資料の促進と、便宜をはかるうと考へ」、日本の実藤恵秀・松井大作・小川博、および韓国の洪淳昶の諸氏と協力して、編集する計画をたてた。而して『日本訳中国書目録』は小川氏が、『中国訳日本書目録』は譚氏が編集の責任

を負うことになったが、実際に「仕事が始まると、すぐこのもとの構想はたいへん実行しにくいことがわかってきた。それはお互いに離れており、時間には限りがあり、編集事務は煩雑で、すべて通信にこの仕事の進行をたよることは難かしい。また多くの編集助手を必要としているし、両方に編集のための経費を捻出することは難かしいなどの理由」で、結局譚氏がひとり二種の目録の編集一切を引受けることになった。なお、編集の過程で疑問が生じた場合には、譚氏は常に実藤・小川両氏にこれを質した由である。この結果、本書の表紙に記されているように、実藤恵秀監修・譚汝謙主編・小川博編輯という表現になったが、実質的には譚氏の責任編集である。

譚氏は一九六八年の夏より二カ年間、夫人譚麗萍氏と共に日本に留学、京大人文科学研究所をはじめ、関西の若干の図書館を利用し、二万余項目の中国訳日本語書籍と論文などの資料を収集し、また一万項目近くの日本文化に関する中文書籍と論文の資料を収録された由である。譚氏はこの作業を、訳書目録編集のための予備作業と考へたが、「短期間内に出版できようとは思ってもいなかった」。処が一九七九年二月、香港中文大学中国文化研究所が八日中文化交流国際シンポジウムを開くことになり、その事業の一環として訳書目録を刊行することに決定されたのである。

本書には巻頭に次のような入序Vおよび入代序Vが掲げられており、殊に譚汝謙氏の代序は、序というよりも詳細な研究といふべき性質のものである。

- 序八一V 陳 荆和
- 序八二V 実藤恵秀
- 序八三V Marus B. Jansen
- 序八四V 孫 国棟
- 金 耀基

中日之間語言文学之翻訳(代序) 孫 述宇
 中日之間自然科学之翻訳(〃) 陳 方正
 中日之間訳書事業的過去・現在与未来(〃) 譚 汝謙

右の譚汝謙氏の代序は八一頁にのぼる長文で、多くの統計表を作成し、訳書の具体的内容を明示しようとして試みている。最初の表Iに譚氏の挙げた統計表は次の如きものであり、訳書の全内容を示している。

文 訳 類 別	書 数	総 類									
		哲 学	自 然 科 学	応 用 科 学	社 会 学	地 理 学	文 学 語 言	美 術	合 計		
中 訳 日 文 書	六五	三七八	五八二	一、四〇五	一、五二八	五九一	一、〇一五	二〇一	五、七六五		
日 訳 中 文 書	三五	五六九	五五	二八三	一、〇〇四	三一五	一、〇一七	五七	三、三三五		
合 計	一〇〇	九四七	六三七	一、六八八	二、五三二	九〇六	二、〇三二	二五八	九、一〇〇		

以下、表II・IIIは、中国訳書、日本訳書の年代別数字を表示している。年代は一六六〇〜一八六七年、一八六八〜九五一年、一八九六〜一九二一年、一九二二〜三七年、一九三八〜四五年、一九四六〜七八年に区切られている。中国訳書の場合、毎年の平均書数がもっとも多いのは一九四六〜七八年間の、平均九〇・五冊であり、類別では応用科学・社会科学で全体の半数以上を占めている。表IV〜XIIIは、中国訳書につい

て、総類・哲学類・宗教類・自然科学類・応用科学類・社会科学類・中国史地類・世界史地類・語文類・美術類に分けて、各類ごとの細目別・年次別の統計表である。表IV〜XIIIは、総類・哲学類・歴史類・社会科学類・自然科学類・工程技术類・産業類・美術類・語言類・文学類に分けた、日本訳書に関する統計表である。日本訳・中国訳の発展過程を、萌芽期(一六六〇〜一八九五)、第一過渡期(一八九六〜一九

一)、發展前期(一九二一~三七)、第二過渡期(一九三八~四五)、發展後期(一九四六~七八)の五期に分けて、詳細に考察し、最後に結びとして「中日訳書事業的展望」を論じている。この譚氏の代序は、内容的にもきわめて興味深いもので、本書を単なる訳書目録にとどめず、すこぶる魅力的な書物にしている。実際に訳書目録の作成に苦心した譚氏の体験が、この様な興味ぶかい解説を生み出させたのである。

次に凡例Vに示されている重要な点を挙げると次のようになる。

1、本書に収録した書籍は、清末から一九七八年まで約百年間の日本書の中国訳されたもので、その内容はあらゆる種類の書を含んでいる。

2、日本人が著訳した漢文の書籍・資料で、中国各地で翻刻・発売されたものを著録している。例えば、岡田武彦・荒木見悟編『近世漢籍叢刊』や、京大人文学部研究所編『元典章索引』とか、堀江忠道編『陶淵明詩文綜合索引』まで含んでいる。

3、同一原著でも、訳書の異なるものは、別著として著録している。

4、本書に収められた各書についての基本データは、訳書名・原編撰者・訳校者・出版地・出版者(発行所・経銷

処)・出版年・巻(冊)数・頁数の八項目である。

5、訳書の出版年は、特別の注記がない限り、初版本の年を記載している。

6、本書では原則として所蔵者を著録していないが、清末・民国初の訳書で散佚がいちじるしく、容易に見ることのできないものについては、この種の訳書数百種を収蔵している東京都立中央図書館実藤文庫の函架番号を示している。

7、本書の分類は、原則として頼永祥編訂『中国図書分類法』新訂四版(三民書局、一九七六年)に示す方法に依拠している。

8、訳書の内容が、二個あるいはそれ以上の主題に渉る時は、原則上内容の比重が大きい方に分類し、他の箇所には書名および著・訳者名のみを掲げる。

次に内容について多少検討を試みることにするが、上述した凡例に示されているように、日本人の著述したり、編纂した次のような諸書(歴史類)が、中国訳書として著録されていることは、やはり問題があるのではなからうか。

滝川亀太郎著『史記会注考証』

水沢利忠著『史記会注考証校補』

京大人文学部研究所編『元典章索引』

田村実造編『元史語彙集成』

宋史提要編纂協力委員会編『宋人伝記索引』

近代中国研究委員会編『皇朝経世文編総目録附索引』

若城久治郎編『遼史索引』

藤田正典・久保田文次・嶋本信子編『新青年別巻』

中嶋敏監修『校対十三史食貨志附清史稿食貨志』

青山定雄著『中国歴代地名要覧』

青山定雄編『読史方輿紀要索引——中国歴代地名要覧』

竹添光鴻著『棧雲峽雨日記』

これらの諸書が中国訳書の中に含まれているのは、どう見ても奇妙である。例えば『新青年別巻』の如きは、如何なる意味でも中国訳書ということはできない。竹添の『棧雲峽雨日記』にしろ、もともと漢文で書かれていたものであって、中国訳書ではない。この種の図書は、数から言えばそれ程多くないかも知れないが、本書に収録されていることに、やはり疑問を禁じ得ない。

本書を抜いていく中に、気付かされることは、同一原著に対して何種類もの訳本があることである。それだけ中国人に読まれたことを意味するのであろうか。例えば、宮崎滔天『三十三年の夢』には、宋越倫、A・K、P・Y、金一、章士釗と五人の訳書がある。また決して一般向きの書ではないのに、浜田青陵『東亜文明の黎明』には、孟世傑、徐翔穆、楊鍊、汪馥泉と、四人の訳書がある。文学書には複数の訳本

が見られる場合が多い。三浦綾子の『氷点』には三種、小林多喜二『蟹工船』にも三種、川端康成『千羽鶴』には五種、『伊豆の踊子』には三種、『古都』にも三種、『雪国』に至っては七種もの訳書があるといった調子である。日本文化が中国人にどのように受容されているかを検討する場合、本書はその一つの手掛りを提供するであろう。譚汝謙氏の本書編集の意図は充分達成されるものと考えられる。

次に、訳書の比較的多い著者（文学者を除く）としては、山川均、小山内宏、井上清、多湖輝、河上肇、林鶴一、岩田一男、桑原隲蔵、飯河道雄、厨川白村等の諸氏を挙げることができよう。戦前のものとしては、社会科学に関する、河上肇、山川均、あるいは高島素之等の著書が多く訳されたことは、よく理解できる。例えば、李大釗のマルキシズム撰取も、河上の著書を通じてであることは、周知の事実である。その他、法律書の翻訳も比較的多く、美濃部達吉をはじめ、著名な法律学者の著書がよく訳されている。新中国になってからの翻訳傾向としては、革新的な学者、研究者のものが多く訳されている。その代表的な場合が、井上清氏の著書である。心理学者多湖輝氏のもの、多数訳出されているのには驚かされたが、その実用性の故であろう。実用性といえば、英語学習の岩田一男、日本語学習の飯河道雄等の諸氏のものも、この範疇に入るであろう。数学者林鶴一氏の著書が二三

種も訳されていることも、注目すべきであろう。付言すれば、加藤繁氏の『支那經濟史考証』上・下が、呉杰氏（現在復旦大学教授）によって訳出されており、四巻に分冊されている由を、かつて呉杰氏から直接伺ったことがある。但し、第三、四巻は文革中に出版された為、一般には発売されず、「内部書」として刊行された。本書では、「補遺」の部分に第三巻のみを著録しており、第四巻は取められていない。恐らく、譚氏は第四巻の刊行を確認できなかったからであろう。

最後に、索引としては「書名索引」「著者索引」「訳者索引」および「索引首字筆画檢字表」「索引首字四角号瑪檢字表」「索引首字漢語拼音檢字表」「索引首字日本語読音檢字表」を付加しており、最後に「本書日中各出版者全稱簡称対照表」を掲げている。この索引の編纂は、譚氏の最も苦勞された点のようである。さきの「日中訳書目録編集記」にも「索引の編纂は最も困難な仕事であった。中国訳日本書綜合目録の三種類の索引は、みなその首字字画の多少により、再び八永字八法Vの順序に並べ、……索引の首字檢字表は筆画によってわけ、漢語拼音、日本語読み、四角号瑪に配列した。日本語読みで人名と書名を書き写すことが困難であることは、いうまでもない。漢字の筆画の多少の計算と、筆画の先後の順序にしても、中国と日本では、字体の書き方あるいは習慣のちがいに、差異がある。……」と述べており、如

何にその為に苦勞したかを具体的に説明している。同じ漢字と言いながら、現在のわが国で使用されているもの、中国本土で使用されているもの、更にそれ以外で使用されているものを比べると、譚氏が指摘されるように「日中兩國の漢字の差異の多くあることを、我々は身をもって感じさせられ」る次第である。同時に、その為には譚氏が如何に苦心なさったかも、よく理解できる。

この種の目録は、世界中の研究者によって利用されると考えねばならぬ。それ故、中国研究者であれば、どこの国の人でも、利用しやすいように、索引が編集されていなければならぬ。その点、譚氏の配慮は万全というべきであろう。時々「索引」を作成することのある筆者としても、教えられる点が多い。

なお、続いて『日本訳中国書綜合目録』も刊行されることと思うが、一日も早く二書がそろって、日中文化交流を研究する上に役立つことを期待してやまない。最後に、この貴重な目録を立派に完成された譚汝謙氏に深い敬意を表する次第である。（一九八〇年初版、香港中文大学出版社、B5判、九七三頁）